

いつもと少し違うこと、学んでみた

本学には「体験活動プログラム」というプログラムがある。ボランティアや就労体験、フィールドワークや海外でのプログラムなど、教室での学びを超えた多彩なプログラムが毎年多数開設される。私は一年間修学期間を延長し、そこでできた時間を用いて、この体験活動プログラムのうち、日本の伝統文化である「花火」について考えるプログラムに参加した。専攻の法学や政治学からはやや離れた領域であるが、非常に濃い学びを得ることができたので、以下その体験を簡単に記したい。

本プログラムの内容は大きく三つ：①花火についての基礎知識の理解（座学）、②花火大会でのボランティア活動・花火会社の工場見学、③花火業界が抱える課題についての研究報告、であった。まず①について。海外では花火は専らコンサートやカウントダウン等のイベントの装飾として用いられる一方、日本では「花火大会」という、花火そのものを鑑賞する大会が存在する点が特徴的だ。長岡・大曲・土浦のような大規模の大会をはじめとして、各地域の花火師がそれぞれ自身/自社の作品（花火玉）を持ち寄り、打ち上げたものの出来栄（綺麗な円状であるかどうか、色の入り具合など）を評価、優れた作品を決める。牡丹・菊・スターマインといったそれぞれの花火の（形の）名称や、花火の打ち上げ・発色の化学的な仕組みなどについて学習した。

②について。10月末に、愛知県蒲郡市で開催された第3回花火甲子園にボランティアスタッフとして参加した。普段経験することのない大会の運営側に立ち、チケット裁きやお客さんの誘導を行えることはとても貴重な経験だった。仕事後は他の参加学生と共に花火を鑑賞した。併せて、本プログラムに協力してくださっている花火会社の工場にお邪魔させてもらい、いかに花火玉が製造・保存されているのか、実演を交えながら学ぶことができた。

③について。①の座学では、花火そのものの知識ともに、花火業界が抱える問題点についても講義があった。花火会社の人員不足、花火自体の収益性の低さなど、喫緊の課題が数多くあるとのことだった。こうした背景知識をもとに、学生同士でグループを作り、定期的にミーティングを開きながら、今後考えられる花火大会の需要創出のあり方について研究を重ね、報告にまとめた。初日のレクチャーの際、花火業界は四方で課題を抱えており、その中で学生に有益な提案ができるかと不安であったが、グループの学生の協力のもと、カメラや撮影スタジオとのコラボ案、アプリケーション導入案など、ユニークな提案ができた。

本プログラムを通して、花火や花火業界についての知識や課題について知り、それに対して解決策を提案するという、これまでに経験のない学びを得ることができた。花火について

の基礎理解ができた点、次の夏以降の花火大会ではより深い視点で打ち上がる作品を見つめることができるのではないかと思う。また、花火大会や花火制作会社の活性化のために、少しでも多く花火大会に足を運び、有料観覧席で花火を楽しみたい。

実は本プログラムのほか、春季休業期間中にもう一つ、林業について考える体験活動プログラムに参加予定である。こちらは南伊豆町にて、薪生産・納品のプロセスに従事して地域との連携について学ぶほか、猪の解体に触れることで獣害について考えるプログラムである。間も無く卒業予定だが、専攻にとどまらず様々な学びに触れていきたい。